

# 影あそび

吉羽善

先日絵を描く友人から聞いたのだが、実は印刷用のインクには影があるらしい。

普段は印刷所の照明係がまっすぐ真正面から明かりをあてているので見えないが、ライトを斜めから当てたりインクの立ち位置をずらしたりすれば、紙にも影が写せるのだという。

デザインやイラストをやっている人の間ではそれなりに知られていることだそうだが、普段文字ばかり印刷してもらっている身なので全く知らなかった。そう素直に言葉にすると、件の友人はそれはそうだろうと頷いた。

「文章なんて、影があっちゃ読みづらいだけだろうしね」

かく言う友人自身も、普段漫画を描く時に利用したことは一度もなく、過去にイラスト本を作ろうとした際、用意した絵の一枚に合うのではとSNSで他の絵描き仲間から勧められて初めて知ったそうだ。

とはいえ、小説などの文字ばかりの本でも、インクの影は全く現れないという訳ではないらしい。文字が滲んでしまっているように見える落丁の中には、うっかり影が写り込んでしまっているだけの場合もあるのだという。

「印刷所に照明の注文したことある人なら気付くらしいよ」と季節限定のフラペチーノを啜りながら語る友人に、その時はへえと間抜けな相槌を打ちながら知らない世界を覗き見た時のちょっとした面白さを感じたばかりだった。だが、その日の夜に布団に入って読みかけの文庫本に手を伸ばした瞬間、ふと改めて「インクの影とやらは実際どのようなものだろう」と気になり始めた。

もしかしたら知らない故に気付かなかっただけで、既にどこかの絵やデザインで見たことがあるのではないだろうか。「これがインクの影だ」と理解した上で、実物を見てみたくなった。

文庫本まで中指第一関節まで届いていた手を方向転換し、枕元のスマホを開く。画像検索アプリで検索をかけると、インクの影を活かした様々なポスターやイラストが次々と現れる。

その中には、絵の下や記号の傍らで影と共に踊る文字たちもいた。斜め上空から青いスポットライトを浴びたイベントのタイトル。

イラストのインクの影の下、名脇役のように小洒落たフォントで記された説明文。三方から光を受け、プリズムの影を纏うロゴマーク。

アプリをスクロールする度に現れるクールなインクの影とそれを活かしたデザインを眺めていると、何だか自分もハイセンスになったような錯覚を覚える。これも印刷所の照明技術者の賜物だろうか。

その心地よいぬるま湯のような錯覚に浸っている中で、ふと私の中の小説書き脳が「このインクの影を小説の演出に活かしたら格好いいのでは」と囁いてきた。我ながら非常にわくわくするアイデアだ。早速画像アプリを閉じると、そのままグーグル検索を立ち上げる。

インクの影を演出に生かすのなら、まずはインクの影と印刷所の照明技術について多少なりとも調べる必要があるだろう。それからどういった演出なら実現可能か、それでどういう話のどんなシーンで影を使うか、そういったことを考えるべきだ。

そう頭では理解しつつも、先走った脳内の左上辺りは既にあれこれと好き勝手なアイデアを浮かべ始める。

キーワードのインクだけ影をあてるのはどうだろう。いや終始特定の単語だけに照明を当てるのは、読む時に鬱陶しいかもしれない。長文全てに影があれば友人の言う通り読みづらいことこの上ないだろうが、例えば特定のシーンの文章のみ照明を落として影をつけるくらいなら平気だろうか。こんなことなら、むかし演劇の裏方もどきの手伝いをしてる時にもっと照明についても聞いておけばよかった。

だが、先走るアイデアを放し飼いしたまま二、三日ほどリサーチを続けた後、残念ながらそれまで思い付いた影の演出のほとんどを諦めた方が良さそうだ、という結論

に至った。

あれこれ調べて判明した、インクの影の特性のせいだ。

そもそもこれほど面白いことが、どうしてあまり知られていないのか。文章や漫画は影があると読みづらいし、イラストも通常はデータ通りに印刷されるものばかりだから、影を写さない印刷が普通だということはもちろんある。だがそれ以上に、真正面からの照明をあえて避けて紙に写すということの難易度が、その特性により跳ね上がっていることも原因だろう。

その特性とは、インクの影が我々の影とは違い、かなり自主的で気紛れな存在だということだった。

写真の被写体で言うのなら、活発な子供や動物に近いのだ。印刷所の照明についての説明や利用者のブログでは、皆口を揃えて「インクの影は、我々の思い通りに写ってくれるとは限りません」と忠告していた。落ち着きのない影たちを宥めずかして興味を引き付け、お行儀よく紙に写ってもらうためには、印刷所の照明係でもとりわけ熟練の技が必要なのだという。

普通の小説などのように真正面から照明を当てるのであれば、すぐ近くにいますインクがしっかりと影を押さえている際に写すことができる。

だが、インクと影の立ち位置がずれる場合にはそうもいかない。

結果、技術のある印刷所でも一発で思った通りの位置にインクの影を写すことは難しく、ミリ単位でのずれは仕方のないものとされるらしい。中には勝手に走り出して大きくずれた場所に写ろうとしてしまう影もいるという。

そんな訳で、原稿通りに印刷してほしい人にはお勧めできない。そして大抵の原稿は、予想外の影の動きを計算にいられて作られてはいない。だから印刷所で照明係を置いているのは、収益のためというよりも半分趣味のところが多そうだ。

「それこそが影を使った印刷の面白さではありません」とやはり口を揃えて言う印刷所や利用者のブログを仕事帰りの電車の中で読みながら、私はそっと溜め息をついてアイデアのほとんど全てをお蔵入りとした。

恐らく彼らの言う通りで、暴走した私の脳内の片隅が次々と繰り出したアイデアには、その面白さを活かせる要素が足りていなかったのだ。いつか別の小説を書いている時に、もっとインクの影の自由度を活かせるようなタイミングを窺った方が良かったら。同じようにインクの影を演出で使う小説が先に現れないことを祈りつつ、今はとりあえず照明係のいる印刷所のウェブサイトをブックマーク登録するだけに留めていると、電車がもうすぐ最寄り駅に着くという車内アナウンスが流れた。

駅を出て自宅へと向かう夜道の途中、まばらな電灯で照らされた私の影は、インクの影とは違ってどこまでも行儀よく私の後をついてくる。ように、見えた。

## 吉羽善

カクコムで小説の発表をはじめ、二〇二〇年のゲンロン 大森望 SF 創作講座の第五期を受講。第五回ゲンロンSF新人賞で選考委員特別賞を受賞。その後、『小説すばる二〇二二年四月号』（集英社）に寄稿した「ます」でデビュー。SF同人誌『Sci.Fic2021 アルコール』に寄稿した「或ルチュパカブラ」が、翌年、大森望編『ベストSF2022』（竹書房）に選出された。

『小説すばる二〇二二年十一月号』に「妖精飼育日記」を、『NOVA 2023 年夏号』（河出書房新社）に「犬魂の箱」を寄稿するなど、幅広く活躍されています。

「影あそび」の姉妹編「五時の魍魎」をオンライン SF 誌 Kaguya Planet にて公開しています。こちらはディスプレイに表示された文字にまつわるお話。500 円で会員登録してお読みください。

<https://virtualgorillaplus.com/nobel/kaguya-planet-november2023-5/>

